

福田晴虔 著

ブルネッレスキ

イタリア・ルネサンス建築史ノート〈1〉

定価 6,825 円 (本体 6,500 円+税)

A5判上製カバー装 344頁 挿図179点 ISBN978-4-8055-0667-7 C3070

イタリア初期ルネサンス建築家シリーズの第1巻

ブルネッレスキの全作品の展望と研究のための典拠を網羅、詳細な年譜と参考文献を付す。

フィレンツェ大聖堂クーポラの建造に生涯をささげた近代的技術者の先駆、「透視図法」の創始者、「古典建築復興」の立役者などと位置づけられてきたブルネッレスキ (Filippo Brunelleschi, 1377-1446) を、絵画や彫刻とは異なる「建築」の独自性追求という視点から捉え直す試み。

中世的な因習にとらわれた職人世界と、新たな市民社会の中で通俗化してゆく古典復興ブームとの狭間にあって、それらと衝突を繰り返しながら不羈の前衛的姿勢を貫き通し、建築のあるべき姿を問い続けたブルネッレスキの業績は、西欧建築の世界に後戻りを許さないための大きな礎石となった。いまなお多くの妄説と誤解に包まれたブルネッレスキ像を、史料と遺構の徹底的な再検討を通じて洗い直そうとする。

【著者略歴】 福田晴虔 (ふくだ・せいけん)

1938年 秋田県に生まれる。

東京大学工学部建築学科卒、建築史専攻

東京大学助手、大阪市立大学工学部講師、助教授、九州大学大学院教授、西日本工業大学教授などを経て、現在九州大学名誉教授
 主著(著作・翻訳):《パツラーディオ》鹿島出版会、1979年、アルド・ロッシ著《都市の建築》翻訳(大島哲蔵と共同)大竜堂、1990年、《建築と劇場—十八世紀イタリアの劇場論》中央公論美術出版、1991年、ジョン・ラスキン著《ヴェネツィアの石》I, II, III 翻訳、中央公論美術出版、1994-96年 その他

イタリア・ルネサンス建築史ノート シリーズ

「建築家」という言葉が誘うロマネスクな響きに惹かれ、気ままに西洋建築の世界を涉獵してきた半世紀であったが、遅まきながら原点に立ち戻り、イタリア・ルネサンスの建築家像を私なりにまとめてみようと思い立った。残された時間はあまり多くはないが、ブルネッレスキから始めてブラマンテ辺りまでは、気力の許す範囲内で、辿り直してみたいと考えている(著者)。

A5判上製カバー装 各平均350頁 各予価6,825円(本体6,500円+税)

第2回配本	第2巻	アルベルティ	2012年秋刊行
第3回配本	第3巻	理想都市	2013年秋刊行
第4回配本	第4巻	ブラマンテ	2014年秋刊行



はしがき

I. 「建築」に向かって

アルベルティによる賛辞 / La Novella del Grasso とブルネッレスキの容姿 / 彫刻家ブルネッレスキ / 洗礼堂扉競技設計 / ローマ遺跡調査 / 未知なる「建築」

II. フィレンツェ大聖堂クーポラ

アルノルフォ・ディ・カムピオからフランチェスコ・タレンティまで / クーポラの競技設計 / 仮柱なしによるクーポラ建造 / ブルネッレスキとギベルティ / ブルネッレスキの器械 / ゴシックから古典へ—空間尺度としての建築 / ランターン (頂塔) / ドラム側面の「エディコラ」(屋形)

III. 透視図法

マネッティによる説明 / ギベルティの透視図法 / 透視図法とルネサンス絵画 / 正統作図法 / 透視図法研究とブルネッレスキ評価

IV. オスペダーレ・デリ・インノチェンティ

最初のルネサンス建築 / 工事経過とフランチェスコ・デッラ・ルーナ / 空間の幾何学と古典モチーフ / 都市空間と建築 / 市民社会の矛盾と建築

V. サン・ロレンツォ聖堂

再建計画とメディチ家 / 聖堂広場計画とブルネッレスキ / ミケロッツォ、チャッペリ、ドメニコ・ダ・ガイオーレ / グリッド・プランと単位空間 / ウィトルウィウスとブルネッレスキ

VI. サン・ロレンツォ聖堂旧聖器室

祭壇上部の天空図と図像学 / 祭室の増築時期 / 比例体系 / アムブレラ・ドーム / 建築の基本単位としての「集中式聖堂」 / ドナテッロと建築

VII. パラッツォ・ディ・バルテ・グエルファ

フィレンツェ共和国とグエルフィズム / 初期人文主義と都市 / 敷地買収経過と工事時期 / ブルネッレスキと都市建築

VIII. 住宅建築と軍事建築

ヴィッラ・ラ・ベトラリア / アポローニオ・ラビの家 / バルバドーリの家 / パラッツォ・カッポーニ / パラッツォ・パツィーウアラテジ / パラッツォ・ジウンティーニ / パラッツォ・ブジニバルディ / パラッツォ・ピッティ / 城壁と城砦—軍事建築とルネサンス都市

IX. パツィ家礼拝堂

工事時期と設計者の問題 / パツィ家とサンタ・クロチェ修道院 / 既存の躯体と寸法体系 / 空間軸の直交

X. サント・スピリト聖堂

聖堂再建と広場計画 / ジウリアーノ・ダ・サンガッロの図面 / 半円形アプスの屋根と高さ変更 / 交差部の処理とクーポラ / ブルネッレスキの計画手法 / ファサードの問題

XI. サンタ・マリーア・デリ・アンジェリ修道院「ロトンダ」

スコラリ兄弟の寄進 / アムプロジョ・トラヴェルサリと集中式聖堂 / 「空間の造形」 / 復原の試み / サンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂の「ロトンダ」とブルネッレスキによる批判 / 終焉

XII. ブルネッレスキの周辺—ギベルティとミケロッツォ

ギベルティと建築—サンタ・トリニタ聖堂聖器室 / 「天国の門」に見る建築表現 / 初期ルネサンスと「古典主義」: ミケロッツォ—コージモ・イル・ヴェッキオの初期の作事 / ドナテッロとの共同作品、墓とプラト大聖堂説教壇 / サン・ミニアート聖堂の「十字架のチャペル」 / サン・マルコ修道院 / パラッツォ・メディチと「ブニャート」 / 初期のメディチのヴィッラ群と「中世趣味」: トレヴィピオ、カファッジョーロ、モンテプルチアーノの市庁舎、カレッジ、フィエゾレ / 晩年 / 「初期ルネサンスの危機」

年譜、参考文献目録、索引

あとがき

イタリア・ルネサンスは、「建築家」という新たな社会的職能を産み出した時代である。そのことは、「建築」の営為が彫刻や絵画、工芸などとは異なる独自の目標を掲げるものとして意識されはじめたことを意味する。従ってこの時代の建築を見て行くことの意義の一つには、「建築家」を志した人々による、「建築」ないし「建築的なるもの」の発見の努力を見出すということがあると思われる。しかし建築はそれぞれの社会の欲求（あるいは「欲望」というべきか）の結実でもあって、そうした社会からの仮借のない欲求は、必ずしも「建築家」たちの目指すものと方向が一致する保証はない。「建築家」という立場を自覚することは、そうした社会的欲求に立ち向かい、それと格闘して行く宿命を負うことを意味する。それは芸術家たちにおけるいわゆる「表現の自由」の確立ということとはかなり質を異にする問題であって、建築家の場合には、多かれ少なかれ社会に対する一種の「工作者」として、作家個人の表現欲求を超えた、社会的使命感を帯びざるを得ない。

もとより当時の「建築家」たちのすべてがこうした使命感を意識していたわけではなかったであろうし、そのような「ドン・キホーテ」的身振りはいずれ挫折するか、ないしは一時のトリック・スター的な役割で終わらざるを得なかったかも知れない。しかしルネサンスの中で一旦表明されたこうした目標とそれを支える矜持とは、幾たびも挫折・妥協を余儀なくされながらも、その後の西欧建築の中でしぶとく生き延びてきたものなのである。建築界の片隅に身を置いてきた私としては、この時代の建築家たちの努力に限りない共感を寄せ、またその作品の偉大さに敬意を払いつつも、建築の歴史をそうした「建築概念の流転」のプロセスとして眺め直して見たい気持ちを捨てきれずにいる。ヴィーコの言を借りるなら、歴史には常に「本流」*corrente* と「逆流」*controcorrente* とが同時併存しているものであり、「建築」概念はその間でもてあそばれ、往きつ戻りつしてきた。こうした成り行きを見きわめるのは、在来の「美術様式史」の方法やイデオロギッシュな「歴史法則」理論などではカバーしきれない問題であって、場合によっては「客観的歴史叙述」の枠を越えた、「批評」の領域での判断を要求される場面が少なからずあると思われるが、その危険領域に踏み込まないかぎり途は拓かれないのではないと思われる。とはいえ、実作品を離れたところでの「建築とは何か」というような形而上学的論議は私の最も不得意とするところでもあり、ひたすら史料と個々の建築自体の読み込みを通じて、ささやかな理解を積み重ねて行くしかない。

(「はしがき」より抜粋)

イタリア・ルネサンス建築史ノート・シリーズ

番線印

書名	定価	冊
第1巻 ブルネッレスキ	6,825円 (税込)	2011年9月刊行
以下 続刊 予約受付中! 年1回 配本予定		
第2巻 アルベルティ	予価 6,825円 (税込)	2012年秋刊行
第3巻 理想都市	予価 6,825円 (税込)	2013年秋刊行
第4巻 ブラマンテ	予価 6,825円 (税込)	2014年秋刊行

ご担当者